



TITLE:

<第2部>[JFDN後記2010] 第3回FDネットワーク代表者会議・後記

AUTHOR(S):

大塚, 雄作

CITATION:

大塚, 雄作. <第2部>[JFDN後記2010] 第3回FDネットワーク代表者会議
・後記. 京都大学高等教育叢書 2011, 30: 262-268

ISSUE DATE:

2011-03-15

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/139332>

RIGHT:

【 JFDN 後記 2010 】

第 3 回 FD ネットワーク代表者会議・後記

1. 教育関係共同利用拠点の始動

2010 年 9 月 8 日（水）、京都大学芝蘭会館（山内ホール）において、全国から 17 の FD ネットワークの代表者が集まり、第 3 回 FD ネットワーク代表者会議（Japan Faculty Development Network : JFDN）が開催された。

本年は、前日に、公開シンポジウム『FD ネットワークの展開と大学教育改革の方向性』を開催し、JFDN の参加者にはそちらにも参加していただき、「教育関係共同利用拠点」の始動という節目に当たって、その時代的な転換点をお互いに確認し合うと共に、大学教育を取り巻く今後の方向性を見据えて、現状の課題を共に探る機会を設定した。

そのシンポジウムを踏まえて、当日はまず、例年通り、それぞれのネットワークから現状と課題について報告いただいた。その後、今回の会議にフル参加下さった、「教育関係共同利用拠点」の認定等にも関わられた、文部科学省高等教育局大学振興課大学改革推進室学務係長の高橋浩太郎氏からコメントをいただいた。それを皮切りに、今後の FD ネットワークの在り方について、さまざまな角度から忌憚のない熱気のある意見交換が行われ、FD ネットワークの今後の転会に向けて、教育関係共同利用拠点の始動の年に相応しい有意義な議論の場をもつことができた。

そこで浮き彫りにされた、いくつかの論点を以下にまとめておきたい。

2. FD 活動および FD ネットワークの多様性

17 の FD ネットワークが一堂に会してみると、FD ネットワークそのものも、また、そこで取り組まれている個々の FD 活動も、非常に多岐にわたることがわかる。

まず、今年は、教育関係共同利用拠点の認定が行われ、その拠点として参加しているネットワークもあれば、そうでないネットワークもある。拠点においても、地域拠点と分野拠点という性格の異なった拠点が含まれている。

また、ネットワークの財政基盤もいろいろである。国からの特別経費、大学間連携 GP、各地域の大学コンソーシアム、連携大学の拠出などがある。

規模的にも、関西地域の 130 を超える大学を巻き込んだ関西地区 FD 連絡協議会のような大規模なネットワークもあれば、島根や福井などのように、地域の数大学による小規模



ネットワークもある。

連携する大学も国公立中心のネットワーク、私立大学のネットワーク、国公立を巻き込んだつばさのようなネットワーク、また、JAED のような個人をベースとするネットワークもある。

ネットワークの基本的な考え方については、京大を中心とする相互研修型 FD の理念を、ネットワークのレベルま



で広げようとする考え方もあれば、参加大学のニーズに応じて、さまざまな研修機会を提供したり、FD 教材を開発することを通して、FD 活動の効率化を図ったり、あるいは、ファカルティ・ディヴェロッパー（FDer）の養成に力点を置いたりといった、ある種のスタンダードかを目指すコンセプトの下で展開しているものもある。

このような広範な多様性のあるなかで、どのような情報共有が可能であるのか、それぞれのネットワークの背景や文脈では馴染まない取組の方がお互いに多くなってしまっているのかもしれないが、しかし、ある文脈における取組においては、なるほどそういうやり方もあるのかという大いなるヒントとなり得る情報も、多様であるからこそ得られるということもあるだろう。そして、何よりも、FD 活動に取り組む一人の教員の枠を超えて、また、一つの学部や大学の枠を超えて、ネットワークを作っていくということそのもののノウハウやその課題などについては、ネットワークが始発した今だからこそ、まだ十分に共有できる余地が残されているとも思われる。

その意味でも、今後 JFDN において、FD ネットワークや FD 活動の多様性をどう整理していったらよいかという課題は、十分に議論されるべき論点となっていくと思われる。今回、特に、FD ネットワーク間のネットワークの意義として、標準化できる部分の共有化や連携による効率化・省力化を図っていくことはできないかといった提案も出され、多様性と標準化のバランスをどうとっていくかということが一つの課題として浮き彫りにされた。多様な FD ネットワークのそれぞれのローカリティを尊重しつつ、その多様性のマッピングを的確に行うことができれば、そこを通すルートのあり方も見えてくるといえるだろう。そのルート自体が見えているわけではないが、このような議論ができるというところに、FD ネットワークのネットワークを形成していく一つの意義が端的に見出されるということなのかもしれない。

3. FD ネットワークを支える人材と体制

FD 活動や FD ネットワークを支えていくのは、何と言っても、人の存在において他にない。だからこそ、こうして FD ネットワークのネットワークを形成する試みも、それ自体に重要な意義を含んでいるのだろうと思う。その観点からすれば、FD やそのネットワークを支え、推進していく人をどう配置し維持していくことができるのかという体制作りに

関わる問題は、今後の大学教育全体を左右する課題であると言って過言ではなからう。

現行の FD ネットワークを支えている大学の教育関係のセンターや委員会、あるいは、地域の大学コンソーシアムなどは、センターの一部のポストを除けば、任期付きのポストであったり、兼担のポストであったり、いずれにしても、長期にわたって任務に取り組むことができない形で、言ってみれば腰の引けた体制で FD 活動や FD ネットワーク活動に取り組まざるを得ないのが現状であると言ってよい。

教育に関わる活動は、FD 総じて、比較的長期的なスパンのなかで、日々の地道な積み重ねが求められることであり、その活動の成果自体もむしろ長い目で見る必要がある。FD や FD ネットワークも一種の教育的活動であり、長期的な視野をもつことが望まれるばかりでなく、スタートラインに立ったところであって、既に確立された教育的取組を円滑に実施していくと



いうことではなく、新たなものを作り出し、それを試行錯誤的に行うなかで、有効なものを定着させていく段階にあると言ってよい。それだけに、特に若手のスタッフが、じっくりと腰を落ち着けて将来を見据えたアプローチに深く関与することができる体制をまず整えることが不可欠である。FD に関わるどんな理念が掲げられたとしても、FD に関わるスタッフ自体のディヴェロップメントを保障する受け皿が用意されていなければ、サステナビリティという点では甚だ心許ないと言わざるを得ない。「仕分け」の時代にあって、その意味で、今の体制は、拠点制度等を導入したとしても、そのもろさを含んだ無駄な事業と言われても致し方ない側面を拭いきれない。

しかし、安定的な人的体制を整えるためには、当然、予算的な裏付けが恒常的に必要とされることになるが、それを今の時代の高等教育に関わる国家財政に期待するのは、残念ながら難しい。また、切り詰めを余儀なくされている大学自身にそれを望むことも甚だ無理筋というものである。では、どうしたらよいか？まさに、この点へのチャレンジが、FD ネットワーク間の連携の一つの大きな役割になっていくだろうと思われる。

FD ネットワークの多様性のなかで、個々のネットワークの持つ個性を伸張させていくこと、そして、連携を図れる部分は協力することを通して、まずは、効果的・効率的な FD 活動をとにかく実践していくことは、その使命を与えられた我々自身が努めていかねばならない基本であろう。その上で、FD や FD ネットワークがどのような機能を果たしているのかをわかりやすく社会に伝えていくこと、そして、FD ネットワーク間の合意として、その機能の重要性を主張することを通して、人的体制づくりが急務の課題であることを社会に対してアピールしていく必要があるだろう。それは、残念ながら一朝一夕にできることではなく、時間を要することであるが、そんな地道な積み重ね以外に、先の見えない FD に関わる体制を変えていくことは難しいのかもしれない。その難しさにどこまで堪えてい

けるのか、先行きは決して明るいものではない。

4. FD 評価の課題

社会に FD 活動や FD ネットワークの意義をアピールするというときに、FD の効果をどう評価したらよいのか、また、FD ネットワークの効果をどのように評価したらよいのか、いわゆる「FD 評価」の課題が浮上してくるが、これらもまだこれから問題である。

「FD 評価」と一口にいう言葉のなかに、これもまた非常に多岐にわたる領域やフェーズがあって、単純に割り切れるものではないというところに、また別の難しさが潜んでいる。

例えば、FD に関わる単位を考えてみると、学生と教員、あるいは職員など、大学の個人レベルを単位として考える場合もあれば、授業や科目、カリキュラムといった課程レベルを単位とする場合もあり、また、学部や大学といった組織レベルを単位とする場合もある。さらに、ここでは、大学間の FD ネットワーク全体を単位として考える場合もある。



また、FD に関わる成果を捉えようとする際に、教育に関わる動機づけを問題にするのか、あるいは、教育のノウハウに関わる知識・技能を問題にするのか、教育の内容や方法をどう捉えるかというメタ的なレベルでの教育観を問題にするのか、あるいは、人同士、組織同士のネットワーク形成のあり方を問題にするのか、さまざまな観点が考えられるであろう。

さらに、評価の目的という点からしても、教育活動自体を改善するための目的で行う場合、教育活動の成果等を社会に示す目的で行う場合、FD に関わる現状を明らかにすると共に研究等に資する目的で行う場合などが想定されよう。

また、上記に示したいくつかの要素は、お互いに相互作用する可能性があるということにも留意しておく必要があるだろう。例えば、FD ネットワークの活動は、個々の大学の教育に寄与していくことが求められているし、逆に、大学単位での FD 活動が、FD ネットワークにも影響を及ぼすということもある。

関西地区 FD 連絡協議会では、総会時に、各大学の FD 活動をポスターで提示し合い、相互に評価し合う機会を取り入れている。これは、FD ネットワークを利用した各大学の FD 評価の試みと位置づけられる。まだ 1 回の試行であり、FD に関するこのような相互評価の機会が、今後どのようなインパクトをもたらすかは未知数であるが、一つの工夫として回数を積み重ねていくことで FD ネットワークのなかに何かが起こっていくようなことがあれば、関西地区 FD 連絡協議会という一つのローカリティのなかでの実験的試みが、ネットワークを超えて広がる可能性もあるであろう。逆に、何の変化も生み出さないよう

であれば、それは淘汰されていくということにもなるだろう。いずれにしても、そういった具体的な FD 評価に関わるチャレンジの動向を共有していくことは、FD ネットワークのネットワークの一つの役割として位置づけられていくであろう。

逆に、FD ネットワークのネットワークとして、唯一の評価方法を確立することを最初の目標に掲げることは、FD 評価自体に多様な相が含まれている以上、それが有効であるかどうか疑問を感じる部分も少なくない。特に、FD ネットワークの評価という点では、それ以下のレベルでの FD 評価とはまた違った側面が浮上することにもなり、難しさも大きくなると思われる。そこでまずは、多様な FD ネットワークがあるなかで、それぞれのローカリティに即した評価のあり方を模索していき、そのさまざまなチャレンジのなかから、ある状況の下での有効な評価のあり方を共有していくことから始めていかざるを得ないのではないと思われる。そのなかに、社会に対してアピールできる情報提供のあり方が浮き彫りにされれば、上記の体制作りの一助にもなっていくこともあるであろう。

ただ、大学評価の文脈などでは、最近、教育の効果を評価するということが、比較的軽々に要請されているが、しかし、効果の測定というのは、そう簡単なことではなく、いたずらに標準的な効果測定の方法を開発するといった動きにならないように留意していく必要があるだろう。たとえ、そういった方法が開発されたとしても、次の瞬間には、その測定値のための FD や FD ネットワークになってしまう可能性も少なくなく、本末転倒に陥ってしまうということがあるからである。そうならなれば、その測定方法によって測られるものは、すでに、FD 活動や FD ネットワークに関わる特性からずれてしまって、妥当性が下がってしまうということにもなる。FD 評価で目指すべきは、その意味で、ある種のオーセンティシティであって、FD 活動の文脈に埋め込まれた評価を目指すことを基本としていくべきであろうと思われる。その辺も含めて、FD 評価のテーマは、今後の重要な課題になることは間違いなく、懸案事項として意に留めておきたい。

5. JFDN の今後に向けて

今回の JFDN の議論のなかでは、上記の論点などとも関係して、JFDN そのもののあり方についても問題提起がなされた。

第1回の JFDN 会合の時から、佐藤浩章先生（愛媛大学）から問題提起されてきていることであるが、「FD ネットワーク代表者会議」とその英語名「JFDN (Japan Faculty Development Network)」との不整合の問題については、今にして考えてみる



と、ある部分、意図的に不整合を作り出していた部分もあったかと思われる。基本的には、「FD ネットワーク代表者会議」という名称に忠実に、FD に関わるネットワークの中心的な方々に集まっていただき、情報交換をする場を設定するという趣旨で構想されたわけで

あるが、しかし、言わば、FD ネットワークのネットワークということで何がやれるのか、どう発展していけるのかという点に関して、私どもで具体的なイメージが作れていたわけではない。単なる FD ネットワークの情報交換だけでいつまでもやっていけるということもないだろうし、一方で、うまく発展していけば、FD に関わる中心的なネットワークに育っていく可能性もあるだろうという希望的観測もあって、英語名は「JFDN」というより広範な意味をもたせた愛称にしてはということもあったとように記憶している。もちろん、「ジャフドン」という音が、最初に言い合ったときは思わず笑い合ったくらいの奇妙さも持ちながら、それを呼び合っているうちに何となく親しみの持てる響きもあって、その愛称を採用したのはそんな副次的な理由のほうがむしろ大きかったように思う。ただ、そういう曖昧な我々自身の見通しが、混乱を招く部分も確かにあったのだと思う。

しかし、瓢箪から駒というか、FD ネットワークの情報交換の場としての年に一度の会議において、その不整合を問題にする議論が生まれてくれたというのは、そんないい加減さを持って JFDN を始めた私どもにとっては、とてもありがたいことであったと思う。そういう議論が起こることで、淡々と情報交換で終始しがちな会議も活性化し、ルーチン的に毎年会議だけをこなしていればいいということになりがちな主催者側に対しても十分な刺激があった。

今回の議論のなかで、FD ネットワークのネットワークの存在意義として、標準化できる部分は標準化を図る場として機能することが一方で提起され、他方、FD ネットワークは創発型でいくべきであり、個々のローカリティを尊重して、それぞれの現状を交換するなかで何か新たなものが生み出されればよしという意見（小田隆治先生・山形大学）も寄せられ、JFDN の今後の在り方もまだ混沌としている状況である。しかし、まさに、このさまざまな立場の攪拌状態のなかから、何らかの新たなものが生まれてくる可能性を感じさせる部分もあり、それこそまさに「創発」であって、当面はその「創発」が期待できるような動きを、



我々は大事にしていくということは捨てることはできないだろうと思われた。もちろん、その何か生まれ来るものが、ある種の「標準化」というカテゴリーに含まれるものであるかもしれないし、あるいは、まったく今予期できない何かかもしれないが、少なくとも、JFDN の主催の側からすれば、今の時点で、こういう方向性で突っ走ればよいという明確なヴィジョンが見えていないということもあり、JFDN のあり方そのものの議論も含めて、辛抱強く「創発」を期して、お互いの相互作用を活性化する JFDN にチャレンジしていくことができればと思う。

今年も酷暑の残る 9 月上旬の 2 日間の長丁場の会合にご参加いただいた各 FD ネットワークの代表者の方々に、ここに記して心よりの感謝の意を表しておきたい。継続は持続

なりで、何か工夫を講じつつ、次年度も JFDN を企画・実施していく所存であり、なかなかみなさんの意に添う形での会合にしていくことは難しいかもしれないが、是非、引き続き、ご協力いただければ幸甚至極である。

最後に、裏方として JFDN の会合の運営を献身的に支えてくれた、京都大学高等教育研究開発推進センターの若手スタッフ、及び、補佐員の方々に、記して感謝の意を表しておきたい。

(大塚 雄作)

